

精神科病院を出て、町へ
——ACT がつくる地域精神医療
(岩波ブックレット)

伊藤順一郎

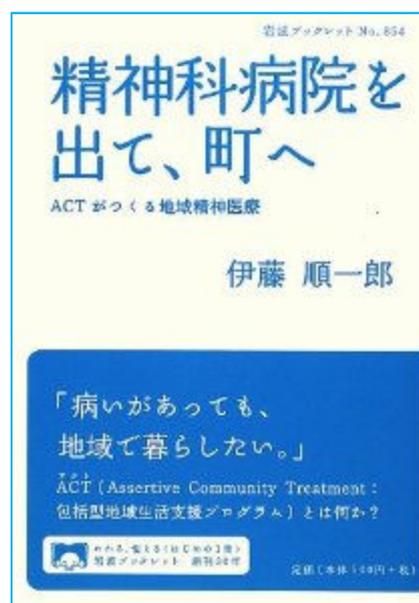
500 円＋税

はじめに

- 1 「精神科病院への入院」がもたらすもの
- 2 日本の精神医療がかかえる歴史的事情
- 3 これからの精神医療がめざしたいこと
- 4 白衣を捨てよ、町に出よう

——ACT という実践

- 5 地域から精神医療の「概念」を変えよう
おわりに



僕たちは、精神医療という分野で、2000 年ごろから ACT (アクト/Assertive Community Treatment: 包括型地域生活支援プログラム) という支援方法にこだわって、その実践や日本での普及に取り組んできました。

ACT とは、精神科医、看護師、作業療法士、精神保健福祉士などがチームを組み、地域社会のなかへ訪問していき、精神障害をもつ人々の治療やケアにあたるという方法です。

ACT の実践の試行錯誤を繰り返し、今、僕たちがたどり着いた感想は、ACT の実践を日本に定着させようとするのは、そのまま「精神医療」という言葉の意味することを変えることにつながるということです。

精神医療が、鉄格子や鍵のかかった扉の向こう側にあるのではなく、町の中であって、だれもがアクセスしやすいものになること。治療のための強制的な手段は極力少なくなり、代わりに、安心感や安全保障感を生み出す人と人との関係性が、医療や支援の真ん中にあるものとする。そして、病いの治療に関して、いつまでも医療者が「教え知らしめ」たり、薬物療法の処方箋を書くだけの存在でいるのではなく、病いを負った人が自分で自分を助け、自信を取り戻す、それを支援する人として存在すること……

この本が、精神医療という窓からの視点として、地域社会における人と人とのありかたにほんの少しでも問題提起が出来、多くの人々が、「こころの病い」や「脳の病気」と呼ばれる精神疾患や、それに対処する社会の仕組みについて、考えを深める役に立つことが出来たら、こんなうれしいことはありません。

(「はじめに」より抜粋)